

桜花 二



ラバウル編

山崎は畑から泥まみれの顔を上げ、スカーフで汗をぬぐった。季節の廻らぬこの地の重たい湿気を背負い、彼は畑に立っている。この時代の若者の憧れ、海軍航空隊の白い絹のスカーフは、今や泥まみれの雑巾であった。

山崎の後ろでは、杉本が長い髪を鉢巻きで押さえ、滴る汗もそのままに頻りに文句を言いながら雑草を引き抜いている。純矢は、日本人街で山崎が買ってきた大きな麦わら帽子を頭に寄せ、芋を掘っては杉本の背に乗っている籠に放り込んでいた。

ここはラバウルに程近い島の海軍航空基地である。ラバウルとは、彼らが戦っている戦争の激戦地として知られているパプアニューギニア領の都市のことだ。日本軍はここに堅牢な要塞を築きあげたために、ガダルカナルやブナが落ちた後も、連合軍はその周囲を取り囲むだけで、最後まで日本軍が保持した地である。

当時、零戦は世界で最強の戦闘機であった。彼らを落せる敵機は未だ存在せず、連日続く空戦によって搭乗員たちの疲労は溜まってはいたが士気は高揚し、連合軍を震え上がらせていた。

だが、精神力だけではどうにもならない事態——食糧不足が起こっていた。補給路を確保する前に戦線を広げてきたために、前線の彼らはいつでも何かしら不足していた。食料は悩ましい問題の一つであり、自給自足体制を引いてもなお限界がある。彼らがいた部隊では、農家出身の兵士に教えを請いながら、滑走路脇のジャングルを開墾し、芋畑にして空腹を凌いでいたのだった。

畑仕事は当番制である。疲労が濃い者を除き、緊張の続く空戦の気分転換にと、各中隊から数名ずつが選ばれて、その日一日畑仕事をする事になっている。今日の当番は第二〇六空の隊員、山崎と杉本、純矢であった。この凄腕搭乗員の三人が、そろって畑当番というのは戦力的に無駄だと総司は当番表を見て指摘したのであるが、山崎でないと杉本と純矢が使いこなせない——一度だけ二人と共に畑に出た士官が決して首を縦に振らなかった。

特に杉本は、当番の日は決まって機嫌が悪いのである。彼は、「戦わず、畑で芋掘りをするのは男のすることではない」という。畑を作る際にも、

「空腹なんか根性で何とかなる。だから芋掘りなんか無用だ！」  
こう言って反発し、総司を大いに困らせたのだった。

だが、山崎が当番長になった時である。彼は不貞腐れる杉本の顔をまじまじと見つめ、「海軍航空隊の搭乗員がまさか、栄養失調による集中力不足で戦死とか……ないよなあ」邪気のない透き通った瞳に杉本は圧倒され、結局開墾に引っ張り出されてしまったのである。

「隊長、腰が痛いです」

暑い日差しの中、草むしりをさせられている杉本は、情けない声を上げて山崎に訴えた。しかし、訴えたところで山崎が畑仕事を免除することはない。十時と昼時にならないと、兵舎にも戻らせてくれないのである。目が回ると言えば、頭から水を被せられ、

「冷えたか？ 気持ち悪くなったらまた言えよ」

課せられたことから逃げようとする時には、非常に厳しいのである。

山崎は芋の葉の中から顔を上げ、杉本を見て微笑んでいる。これ以上言えば、指圧と称して後々どんな痛い目に合わされるかかもしれず、杉本は慌てて芋の葉に顔を埋めた。

相手が橋本や村山であれば、杉本はとっくに畑仕事など放棄して、整備兵と共に愛機をいじり始めるところなのだが、山崎は同僚でもなければ、ただの上官でもない。

杉本の溜息は、熱せられた空気に溶け込んだ。今のせめてもの慰めは、時折風に揺れて鳴く椰子や芋の葉の涼しげな音だけである。

「そりゃあ、俺はこれでも農家の長男ですから、これぐらいどうってことないですよ。でも、橋本達が戦果を上げているっていうのに俺は泥まみれで雑草取りってのは納得できません」

「へえ、杉本は長男か。まいったな、大事な一家の後継ぎが部下だなんて、俺もしっかりしなくちゃな。ましてや飢え死になどさせたら、杉本の親御さんに合わす顔がない」

微笑を浮かべたままの山崎は杉本の頭を撫でた。

「丁度良かった。内地に帰れば毎日早起きして、畑仕事だろう？ いい訓練だ。お前が作った野菜を食べるのを楽しみにしているよ」

「俺は、帰っても零戦の搭乗員です！」

頬を膨らませて杉本は、先ほどから一言も口を利かず、ただ黙々と芋を抜いている純矢に一掴みの土を投げた。

「貴様も嫌だろ？ 俺らは航空隊員だぜ？ 空を飛ぶべきだよな」

純矢は麦わら帽子の影の下の鋭い目を杉本に向ける。汗を拭くと灰が混じった土が頬についた。

「だから、俺が調達してきてやるといったんだ」

「いや……それだけはやめておく」

杉本は首をすくめた。

純矢の調達法は知っている。鬱蒼とした熱帯雨林に入り、狩猟や採集――などという穏やかなものではない。

現地の人々の集落を襲い、家畜や農作物を奪うのである。

当初、このことを知らない杉本は、純矢が調達してきてやろうと言った時には、何かあてがあるのかと、仲間たちと共に手放しに喜んだのだが、山崎はいい顔をしなかった。もちろん、山崎は陸軍が大陸でどんな行為をしているかなど知っているわけではないのだが、陸軍の純粹培養で育った純矢――そして育ての親である神谷の事を考えれば見当はついた。

試しにやり方を山崎が尋ねると、純矢は胸を張り、意気揚々と答えたのである。

「この地に来た際に攻撃を仕掛けてきた住民どもの村を、上空から見ております。夜間、自分が攻撃、制圧いたします」

「……いや、やめておこう。畑を作った方がいい」

苦虫を噛み潰したかのような顔の山崎に、純矢は不思議そうに呟く。

「敵さん給与であります。いい見せしめにもなるのであります」

大陸では、神谷の命令で村を襲い食料になるもの取り上げていたのである。補給のままならない彼らには当たり前の行為であり、純矢に言わせてみれば、皇軍のため、食べ物を捧げさせたというところであろう。

「自分は奴らが隠したのを見つけるのは得意であります」

無表情ながらも意気揚々と話す彼はひどく幼く見えたが、その行為には全員首を振るしかなかった。

「二人とも、手を動かせ、手を」

山崎は芋を引っ張り上げて、純矢に放る。

「腹が減っては戦が出来ぬっていうだろう？」

「そうなのでありますか」

純矢は感心したように言って、受け取った芋に付いている土を払い落とした。そしてその芋で杉本の背を突き、

「貴様の意見より隊長殿だ。戦が出来ぬのでは国のためにならん。さっさと働け」

「いつも思うんだが！ 俺は貴様より一個階級が上なんだぜ？ なのにずいぶん隊長と扱いが違わないか？」

「違うに決まっている。隊長殿は我ら第一中隊の中隊長殿だ」

「俺は第二小隊長！ 貴様は隊長の二番機！ 俺の方が上！」

「二番機は一番機の援護と決まっている」

言い終わるより早く、純矢は畑の中に座り込んで土を掘りだした。こうなっては無駄である。もう杉本の愚痴など彼の耳には届かない。

そもそも純矢は山崎に異様に懐いていた。それは部隊の者たちも認め、あの神谷ですらも認識するほどである。

純矢にとって、山崎という士官は、知らないことを教えてくれるという点で、神谷と同じように見えるようであった。台湾にいた頃も、これほどに純矢がそばを付いて回る士官はいなかったはずだと、総司は時折、指揮所で煙草を吸いながら山崎に話した。

「甘えているんだろうなあ」

そう言いながら、総司は嬉しそうであった。

暑さの中での会話ほど、体力を消耗することはない。杉本は溜息をついて大人しくなり、火山灰が付着する芋の葉をかき分けて雑草に手を伸ばした。

そこへ、整備兵が息を切らして駆けてきた。彼は汗を飛び散らせながらやってくると、

「見張り所からこちらに敵機が向かっていると緊急伝が来ました！ すぐに飛べますのでお願いします！」

敵機と聞いたとたん、杉本は籠を純矢に押し付け、すでに畑を飛び出している。山崎は腰を伸ばして、空を仰いだ。

「飛べそうか？」

「はい、灰はこちらには流れておりません」

ラバウルは火山島である。風向きによっては火山灰が雨のように降り、戦闘機を出せなくなった。

そうかと山崎は煙草を銜えた。

「純矢、行くぞ」

山崎の命令ならば、無条件に受け入れる純矢は、杉本から預かった籠を整備兵に渡し、素早い動きで山崎に続いた。